

観心寺の七星塚

京都市 宇野良雄

大日本楠公會總本部の大きい新らしい表札の掛つた門を入ると内は夕暮だのに明りも無く薄暗い。案内を乞ふと若い僧が出て來た。七星塚に就て尋ねると次の様に説明してくれた。

あれは弘法大師が本山の御本尊を御守りするために法力によつて天の北斗七星を御招きになつたもので、あの様に本堂の廻りに空の星の形のまゝに置かれてゐる塚には一個宛の石がありそれには一字宛の梵字が刻まれてゐる。傳説ではその石は天から降つて來たものと云ひ、御本尊の名を北斗七星聖如意輪（歴史書には靈佛如意輪觀世音菩薩ともある）といふのもあの塚から起つてゐるものである。眞言宗で行なはれてゐる星祭りも實は本山から初まつたものであり、あの塚は祈願に一般の信仰が深いものである。

と云ふ。別に大した事もない。塚の配列が實際の北斗と合つてゐない事も知らないらしく、石に書かれてゐる梵字も解らず文獻もない。天から降つた石といへば隕星であるが塚の石が隕鐵でも隕石でも無い事は明瞭であつた。

最初、楠公と北斗七星に何か関係があるのかと思はれたが、楠正成が本尊七星如意輪觀音を云々の記事が歴史書にあり、七星と本尊との連がりはそれ以前らしく弘法大師と関係あるものらしい。塚に付けられてゐる星名は西森氏の調査によれば隋（支那の古名）時代の蕭結行大義中の黃帝斗圖にある北斗七星の星名と一字も異つてゐず順も合つてゐるとの事である。（挿圖參照）この塚が弘法大師當時から存在するものかどうかは疑はしいものであり、信仰の對象として天の星、天下りの石等と云ひ嚴肅さを持たせてゐるものであるらしく、天文學的な價值は無いにしても、餘り他に類の無い珍しいものである。（昭和十年十二月）